

かりじやダメなので、フィクションはどうやつて現実とかかわりを持つか。そういう話題だよね。キーワードは肉体だ。

被差別部落の内部の話は当時の一般社会からすると仮構みたいな話だからね。それと現実との架橋みたいな話だね……。特に中上は一時期、セツクスを徹底的に書いたから。架空みたいなセツクスが実はわれわれの底辺を流れているドロドロのものなんだという視点。そこらへんのこと、外側にあるように表現してそれが実はわれわれの本当の底辺だ、見えないけどね。そういう問題をどう文学表現として方法化するか、そんな話だったよう思うな。

△純文学の変容——八〇年代

高山 それは『夏の鏡』の日常をうたうということと日常詠の違いみたいなところに行くと思うのですが。

加古 稲村弘が「人生日記帳」と言つているのとは違う短歌ということですね。單なる日記ではなくて、それは文学なんだ。日常に発しても、歌うものはその先に。

黒岩 この話は次回にとつておいたほうがいいのかもしれないけど、『火を運ぶ』の後

記に先生が書かれている「短歌は一人称の、しかも本名の詩である」というところとながつてくるんだよな、きっと。

幸綱 中上健次は「純文学」の最後の人みたいな感じがするね。今はもう「純文学」という言葉も死語になつちやつたけど、あのころは未だ生きていたんだね。

加古 最後の文士ですね。

幸綱 西村賢太とはやはり違うものね。

加古 ちょっと軽い感じがします。

幸綱 ああいうドロドロした抽象的なものはないから。車谷長吉も違うしね。

高山 もう少しくだけた言い方をすると、『夏の鏡』に出てくる人は、歳末に宝くじが当たつたら、そういうふうに思つていて普通の人ではなくて、特別なことを思つてゐる非日常的な事を日常としている人なわけです。それははつきり言つて、どういうふうに定義したらいいのかといつたら、歌人として定義したほうがいいと思ふんです。歌人の日常だから、僕たちが普段言つてゐる日常ではなくて、非日常的な生活実感とかが人間の想像力や創造力よりも優先されてくるんだね。とにかく心の中で行くような時代だった。経済の問題や

大野 歌集の作中主体ということですね。

幸綱 八〇年代は経済成長がバブルの極点まで行くような時代だった。経済の問題や生活実感とかが人間の想像力や創造力よりも優先されてくるんだね。とにかく心の中で何か考えているよりも、現実世界には楽しいことがいっぱいあるし、男と女の世界も含めて、想像世界より現実世界で成就できるという幻想が蔓延した。メチャクチヤな世界さえ少しづつ実現化されてゆくと思

ていて作品を作つてゐる人ではなくて、歌人というのは歌人の日常自体が作品というところもあるのです。

黒岩 高山の言つてゐることはよくわからんんだが……。それで言うと『群黎』にも「東京の若者達」という、現実を生きている人たちをテーマにした歌があるわけだし。

高山 なるほど。ただ、現実を歌うといふことと「日常から」と言つたときのニュアンスの違いかな。佐佐木先生の「日常」というのは「黒岩、宝くじが当たつたらおごつてやるぞ」とか、そういう日常ではなく、歌人としての日常、更に言えば観念化されテマ化された「われ」の日常を歌つている。